

コープふくしま大震災ニュース

がんばっぺ編16

2011年4月27日発行
コープふくしまで取
材中のジャーナリス
ト桐生作成

「緊急時避難準備区域」で共同購入チラシ配布開始

政府が指定した20～30km圏内の屋内退避指示区域が4月22日に解除され、計画的避難区域と緊急時避難準備区域が指定されました。これに伴って、コープふくしま、相双支部では、これまで見合わせていた緊急時避難準備区域の南相馬エリアで共同購入のチラシ配布を26日に再開しました。安全とはいえ放射能の影響が心配されるだけに、配送担当は全て男性が担うことになりました。

20～30km圏内は屋内退避と同時に、自主的避難の勧めも出ていたので、南相馬市の原町地区の共同購入50数軒の3分の1近くは留守でした。「留守のお宅は小さなお子さんのいる家庭なので、まだ避難しているのでしょうか」と、原町担当の山田広幸さんと言います。それでも、震災後初めて訪ねてきた配送車を見て、「やっと来てくれたの！うれしいわ」とよろこんでくれました。在宅の方々は最近避難先から戻ってきた方が多く、また高齢者が多いのが特徴です。高齢者は車がないなどで買い物に行きにくく、配達再会は歓迎されています。



娘さんとその子供は避難し、老夫婦が残っている組合員さんに早速たまごなどを届ける

「目に見えない悪魔」放射能



「何もかも捨てて避難しなければならない」と憤る酪農家

放射能の汚染レベルが高いことから計画的避難区域に指定された飯館村の酪農家などは、いま深刻な事態をむかえています。同村の下飯樋（しもいいとい）で牛の繁殖事業をしている農家では、「いつ避難指示が出るか全くわからないので何にも手がつかない。家の掃除をする気力もなくなった」と話しています。これまでも避難を考えたが、親子の牛12頭を見放さなくてはならなくなるので、できなかったといいます。いつもと何にも変わらない風景の中で、今度避難指示が出れば酪農を「廃業」せざるをえず、原野を切り開き2代で苦労して築いた農場を見捨てさせる原発事故からの放射能を「目に見えない悪魔」と表現していました。



牛を捨てて避難できないと悩む農家



苦労して切り開いた放牧地